

シアワセネイロ

>> MACROSS FRONTIER
>> FOR ADULT ONLY ♡

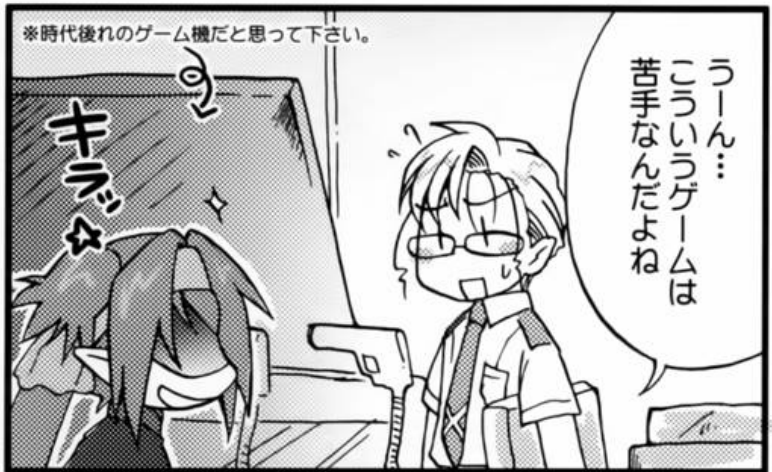


KLAN

KLANG

どうだミシエル
き…着替えたぞ！





おさるさんパニックのきくのです。
うおー！！！！20話で号泣しました。
おかげで原稿に手が出せなかった。
そんなわけで薄い本になりましたが…
ミハクラ大好き本ですよ。
少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

ゲスト・Pekoさんからミハクラ小説を
いただきました！！Pekoさんのお話で
ラブラブ度アップ。ありがとう！！

気合い入れたページとそうでない(笑)
ページがありますが…えーとですね、
察して下さい…キラッ★





命がけ
☆

馬子にも衣装だな
クラン！

んー…
なんて言っか



悪かったよ
クラン

ミハエル
私は帰るぞ!!

ぐわんぐわん



今日日はオシの
言っ事を聞くんたら？
早く運んでくれよ

ははははは

ははははは









こらあッ
調子にのるなよ
おいミシエル!!

ちゅっ
ミシエ...

そ...それ
ダメッいやなの
激しいようっ

あッ
あッ

がッ

あッ
あッ

あッ

あッ



どうかしたか
クラン？



おいおい
顔が赤いけど
大丈夫か？



悪

せつかく
メイド服を着せ
たのだから
脱がせないとね★



こっちの部屋の
掃除が終わったら
ココも掃除するんだ
早くやるぞ！

妄想

>>>補足。蛇足？

お姉さんと住んでいた部屋なんですが、これは勝手に考えたのでございます。今はSMSで暮らしているのだろーと思ひますがその前はお姉さんと暮らしていただろー…そしてまだその部屋は昔のままで、それを口実にしてクランを連れ込んだのです。そんな妄想をしてゴメンなさい。そしてクランのメイド服はC.Cさくらの中でさくらちゃんが着てたメイド服を参考に。エロ少なくてゴメンなさい〜泣。



きっと、戦国BASARA2を大川さん目当てゲームをしなければ、いつきちゃんラブにならなかった。で、マクロスFにも大川さん目当てで見たら、クランさんにメロメロになったヨ！幼女つながりなので、こんなコラボ絵。自分…満☆足☆

プリンティ☆ドリンクー

Peko

本日はSMS有志による飲み会がお馴染み『娘々』で行われていた。束の間の休息に気の知れた仲間同士の飲み会とあれば会話も食も酒もはずむ。

もちろんクラン大尉もその輪の中にいて、なみなみとグラスに注がれた酒をぐいっと一気に飲み干してはおかわりを隣の隊員に何度も注がせていた。

「子供が酒飲むな」

そこに突如背後から現れたのはミハエル・フランだった。クランのグラスを後ろから取り上げ、彼女の届かない高い位置に掲げてしまう。

「子供じゃないくっ、返せっ、ミシエル」

確かに見た目はお子様でも実際は成人しているので飲酒は法的には何ら問題ない。だが、それを知っていても周りがハラハラするほどの今日のクランの飲みっぷりに、「っ」してミシエルがストップパーに駆り出されたわけだった。だがそれは逆効果だったみたいである。

「かえせっ!!」

テーブルの上に乗りあがり、無理やりミシエルからグラスを奪い取ったクランはまるで風呂上がりの牛乳みたいに腰に手をあててグラスの中身をぐびぐびと飲みほした。

「ふんっ」

「……クラン大尉におきましてはたいそうストレスがたまっている様子。まっ、たまにはハメ外すのもいいのかもな」

「ミシエル!？」

気づけば、ぐっぐぐと顔を近づけてミシエルの顔があり、クランは「お、お、お」

「だけ、お、お、お」

だがそれも一瞬の間。ミシエルはそのままクランの頭をぐっぐぐと撫でる。去っていくところだった。

「……はかもの」

その小さな咳きぎ、クランはまだグラスに注いだ酒と一緒に飲み込んだ。

やっミシエルの忠告も虚しく、お開きになる頃にはクランは見事に酔っ払いと化して、足元が覚束すらなくなっていた。

「お前なあ…ほっほっ」と言っていたじゃないか」

「お前が私を子供だと煽るからであっ、責任とっておくっけー」
「からっくクランの腕をとりその体を支えながら呆れているミシエルに対し、クランは火照った顔でまだまだ気丈に「っ」放す。とっつが酔っ払っているせいで余計に気が大きくなって」

「はいはい、俺のせいですが…」

そう言いつつミシエルはその場にいきなりしゃがみ込んだ。

「な、なんだ…?」

「送ってけと言ったのはクランだろ、おぶっついでさあから乗れよ」
「ひんっ」

確かに目の前がぐらぐらと立っているのがやっ、自分の足で歩くことなどできずもない。それにこれ以上あれこれ悶答を繰り返す気力もなく、クランは素直にミシエルの首に腕をまわした。

「っつっつ、ちゃんとかまってな」

それを確認したミシエルはクランのおしりの下に手をまわして立ち上がった。

「…お、おもくはなごっ」

「わっただらな。ミシエルのなまは知ってる。そとでHしたの…」

「…でもなごね。ちっちゃなごねはとととと。ちっちゃなごねもクランは女なごね」

「うー」

ミシエルの手がうしろみきを抱きただまをゆるゆると動かして、ひんひんとクランは震えた。その反応をかりかつかのめろろと見ているミシエルは手の中の淡いうしろみきをあやうく。あやうくの手の平を固くするが、あやうくのうしろみき、それが手に包み込んだものの先端だと気づいてミシエルはほっとした。

「おれが感じてくるのか…」

「はかっ…ミシエルが触るからだよ」

ゆるゆると腫を潤ませながら自分を覗きつけてくくくくく、ミシエルは思案顔になった。

「……」

そつそのまま片手をゆるゆると下の方に移動させ、クランのショーツの中に忍びこませた。

「…なっ、だめだっ…ミシエル…」

慌ててクランが両脚をきゅっと閉じる。だがそれよりも先にミシエルの指先はその中心にたどり着き、軽く溝にそって動き出した。

「あ…んっ…」

「この体でもちやんと感じるんだな」

僅かながら溢れてきた蜜が指に絡みつくのを確認して、ミシエルはゆるゆると蜜を呼びよつに指を動かした。

「ミシエル、ミシエルっ…」

ゆるゆると切なげにクランが何度もおれを呼ぶ。おれ。

「そんな声で呼ぶな…」

「うー」

ミシエルに口を塞がれてクランが静かになる。

いびきけたクランの唇は軽くはじませながら、ミシエルの欲情をうしろ煽った。そんならと奥への侵入を許されたその小さなおれをからめ取れば、わけもわからない様子でおおおおおとわっと思えるのだが、おれ余計に抑えがきかなくなっている。

ミシエルは息の付く間もとせず線の返り尻を叩かせ、クランの口内を遠慮なく犯した。

「はあ、はあ…」

長いうちつけを終えて唇が離れよう、熱い吐息をひきながらクランはミシエルをまっすぐ見つけた。

「ミシエル…おれがうしろのか…」

「おまえもな…」

ミシエルは否定しなかった。

「わたしは…わたしは…」

そつクランは先ほどの愛撫と濃厚なキスのおかげですでに熱を持っている場所を意識して、もつもつと脚をゆるくわせた。

「怖いならやめようね」

「怖くない。おまえが望むなら…」

まさか突然湧いたこの状況に戸惑うものの、今のこの心と体の疼きを満たしてくれるのは、クランと自分とミシエルだけなのだから怖くないな。拒む理由も何もない。唯一不安があるはずは、それはミシエルの本心がわからなくなっただけだった。

☆ ☆ ☆

「いたいっ、いたいっ…」

「はかっ。もっと力抜け、じゃないと俺だっ…」

「~~~~~!!」

「~~~~~」



いたいっ
いたいっ...っ!!

ん...

キッパッ



シアワセネイロ

2008/09/28

おさるさんパニック

<http://www.h2.dion.ne.jp/~sarusaru/>

※無断転載・オークション等禁止※



> OSARUSAN PANIC
> PRESENTED BY : KIKUNO

>> KLAN KLANG LOVE!!